



世界に通用するこれからの教育(子育て)とは？



文科省によると、OECD は、欧米諸国、アメリカ、日本などを含む 38 か国(2022 年 9 月)の加盟国によって構成されており、「世界最大のシンクタンク」として様々な分野における政策調整・協力、意見交換などを行っています。そのなかで、近年、世界的な潮流として、「ウェルビーイング(より良い・幸せな状態)」の考え方が教育シーンに大きな影響を与えています。(OECD ラーニング・コンパス 2030)

日本の次期教育振興計画でもテーマの一つになっています。これらの中で、実現には、エージェンシー(主体的な力)が必要だとして、①責任ある行動をとる力 ②対立やジレン

マを克服する力 ③新たな価値を創造する力、3つの資質・能力(コンピテンシー)が挙げられています。学力はこれらの力を身につける手段の一つにすぎず、(コロナ禍、ウクライナ・イスラエル戦争等から)社会のつくり手を育てるには、非認知能力(点数で計れない力)が重要であると述べています。そもそも、幸せのあり方は多様化しています。これからの社会で子どもを支える生きる力となるのは、自分で考え行動できる主体性であり、(SNS 等で踊らされず?) 社会のさまざまな課題を解決するスキルを持っていることです。

このためには、学校や家庭で自己決定の機会をできるだけ増やすことです。親や周りの大人に制限されたり、命令されたりするたびに少しずつ子どもの主体性が奪われていきます。しかも、主体性を失うほど周囲への依存心が強まります。主体性を育むには、大人が口や手を出さず、子どもたちに自己決定の機会を増やすことです。子どもに考えて行動し、その結果を自分で担い、試行錯誤を繰り返す体験を何度も積み重ねることでしか主体性は育ちません。それだと失敗ばかりでかわいそうだという意見もあるでしょう。でもそれは失敗を認めない家庭・社会に子どもがいるからです。「失敗しても大丈夫」「自分のペースでいいんだ」「挑戦こそ最高だ」「再チャレンジが素晴らしい」となるべきです。(自己決定は、責任とセットで厳しいものです)

このような、自己決定を積み重ねていくと、次第に子どもから「～だと思う」「～したい」という意思表示が増えます。あとは、その意思をできるだけ尊重してあげることです。最も大事なことは、失敗したときに責めないことです。黙って、自分で決めた責任を取ってもらえばよいのです。そして、対立を避け「話し合い」と「再チャレンジ」を優先してください。自律を促す子育ては、失敗を許容し、成長をじっくり待つ子育てでもあります。

(文責・小林)

引用・参考:OECD ラーニング・コンパス 2030

2月のクオーレ開設日

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

*黒字が開設日です。通室生徒は 9 時～16 時。

*赤字以外は電話・来室相談可能日(相談受付時刻:午前 10 時～12 時、午後 1 時～3 時)

*電話相談では、自分の名前や子どもの学校名を名乗る必要はありません。秘密は守ります。

非認知能力を高めよう

これまで、閉じこもりや不登校、ゲーム依存の子どもたちと接していると、心・身体・生活が崩れていくことを多く見かけました。SNS や動画、メディア等や不規則な生活で、偏った心と身体になっていきます。そして、偏った感性（考え方も）になっていくことも感じられます。



これからの子どもたちには、経験を重んじて、五感を楽しんでほしいと思います。楽しむとは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の 5 つの感覚を意識的に活用して、心に潤いやリフレッシュをもたらす満足することです。自然に触れたり、音楽や絵画に親しんだり、香りや味覚を楽しんだり、スポーツで身体の温もりを感じたりすることです。

例えば、私の趣味は登山です。山へ行くと、必ず異なる香りを感じます。季節により、その地・植生により異なります。もちろん、視覚や聴覚、感触などでも自然や動植物と触れ合いを感じることでしょう。全ての感覚を駆使して自然と向き合い、心が満たされるとともに元気を取り戻し生きる力が高まります・・・

また、ある国語の先生との読み聞かせの話題ですが、「初夏の風がほほに心地よく、林がガサガサとなって、走っていく足音がザワザワとなった」という文章と「～林がサラサラとなって、走っていく足音がサクサクとなった」の違いは何かの質問に対して、皆さんは、どんな情景をイメージしてどう答えますか？

ある生徒が、前者は山道（広葉樹の）で、後者は浜辺の情景（針葉樹の）だということです。子どもにとって、この情景をイメージできるには、多くの経験と読書量が必要だということです。このような感性豊かな子どもを素敵だと思いませんか。（この生徒は、家庭で読み聞かせで育ち、読書が大好きだそうです）

前述は2例にすぎませんが、自分の好き・得意なこと、良いところを活かして、自分らしさや強みを磨いてほしいのです。感性豊かな子どもは、物事を心に深く感じ取る能力が高い子どもです。人の表情や言動から小さな変化に気が付いたり、思いやりの心で接したり、楽しいこと・悲しいことなどに感動したりします。感受性が豊かな子どもは、性格が優しく思いやりがあり、魅力的な人が多いと言われています。

つまり、前頁のように、非認知能力を大切にしてほしいと思います。非認知能力とは、知能や学力検査では測定できない能力を意味しています。具体的には、やる気、忍耐力、協調性、自制心、感性など、人の心や社会性に関係する力です。自分のやる気を高めたり、感情をコントロールしたり、自分と他者を大切にしておつきあいを深めたりできる力（非認知能力）の育成が、変化の激しい現代社会のなかで求められています。そのためにも、彼らの自己決定を尊重しながら、子どもたちがいろいろな経験から学んでほしいと思っています。（文責・小林）



ノーベル賞の山中伸弥先生の言葉……

「新しい価値を創造する力」は、OECD のラーニング・コンパスにも示されているように、未来を生きるすべての子供たちにとって必要なコンピテンシーです。子供たちには、学習、スポーツ、芸術など、いろいろなことを経験し、多くの失敗を重ねることが大切だと思っています。失敗から新しく気づくこともありますし、失敗を乗り越える力もつくでしょう。若い頃の失敗は必ず成長につながり、将来の財産になります。子供たちには、ぜひ失敗を恐れずに挑戦してほしいと思います。学校や先生たちには、子供たちがいろいろなことを経験できる機会をつくってほしいと思います。そして、子供たちが挑戦する姿を温かく見守り、必要な時に手を差し伸べてあげるという姿勢が大切だと考えます。失敗や挫折を恐れずに、たくさんの経験をするのが、科学技術の分野はもちろん、様々なフィールドで活躍する人材には必要不可欠だと考えています。（コロナ禍、家庭の教育力低下や学校のスリム化等もありますが、子どもたちの経験の拡がりはどうでしょうか？） OECD Education2030 プロジェクトより